

Diversity of Ocean Research in Kyoto University

平成25年度
京都大学総合博物館企画展

海

2013.7.31 wed → 12.1 sun

日本列島は、“地球上の奇跡”と思える。

いくつもの大陸プレートと海洋プレートのせめぎあいの場で、地震や火山など様々な地学現象の場である。

豊富な降水に恵まれた緑の列島である。

さらに黒潮と親潮が接する場に面し、海の生きものの宝庫でもある。

このような日本の“奇跡”的背景には、

常に「海」の存在があるといえる。

大陸と大洋のはざまに位置する「海洋列島」日本の、自然とそこに住むヒトの営みの連関を過去・現在・未来の視点から示す。

展示では、日本列島と縁海の生い立ちを地球の歴史から

解き明かすことからはじめる。

現在の海の振る舞いを知り、その未来を見据えながら、そこに生きる生物とヒトの生活を俯瞰する。

また、時に過酷な海の姿を伝え、

海を通じた世界とのつながりを認識できるものとする。

Supported by 日本 THE NIPPON



船の科学館・海と船の博物館ネットワーク



京都大学総合博物館

606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL (075) 753-3272 FAX (075) 753-3277
info@inet.museum.kyoto-u.ac.jp
<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp>



第1部 海のはじまり | 海のある惑星・地球。この特異な星の成り立ちを知る。



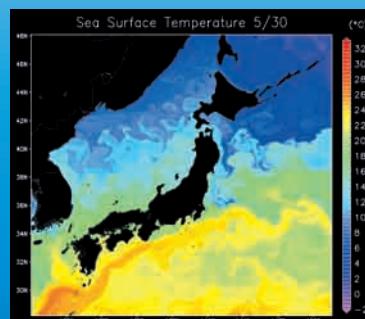
左：現生のストロマトライ。酸素を発生する最も原始的な生き物のつくる構造。化石は大気中に酸素が存在した証拠とされる。西オーストラリア・Clifton湖。(© Kyle Armstrong) / 右：オーストラリア西部Jack Hillsれき岩石中から発見された44～40億年前のジルコン(鉱物)。地球最古の物質。(顕微鏡写真)

第2部 海をはかる | 海をはかる技術の革命的な進歩は、海がいまだ不思議に満ちていることを教えてくれる。



左：世界中の海に3000個以上放流され海中を浮遊しながら物理構造を観測しているアルゴフロート / 右：アルゴフロート投入作業風景(独)水産総合研究センター若鷹丸提供

第3部 海をしる | 地球の気候を決めている海の動態が、物理的な視点から解き明かされつつある。



コンピュータで再現された日本近海の水温分布。現在の超高解像度数値モデルは、10 kmスケールの渦を含めて海流をシミュレートできる。

第4部 海にいきる | 多数の化石や骨格標本で生物の進化史を振り返るとともに最新技術によって明らかになったその生態を紹介する。



左：GPSとアルゴス送信機を組み合わせた発信機を装着したアオウミガメ。正確な位置が分かる。タイ国アンダマン海側のパンガ県。/右：水族館や野生のイルカを間近で科学的視点で観察し、その行動や生態、そして知性を明らかにすることが行なわれている。

第5部 海といきる | 人が海を利用しててきた歴史を振り返る。また、時に過酷な海の姿を受けて、未来につなぐ。



左から：関西国際空港：日本列島の海岸域の人間による現代の大規模利活用の象徴(2013年1月空撮) / 大分横尾遺跡の発掘風景2001年：姫島産黒曜石の石材としての物流の証拠。/津波が残した堆積物の断面標本(陸前高田市)。“千年に一度”的大震災だからこそ、可能な限り記録を残し未来につなぐ。